

## 『訳解笑林広記』全注釈（一）

川上 陽介（工学部教養教育）

## 序

本稿は、和刻本『訳解笑林広記』の全訳と注釈である。『訳解笑林広記』は、文政十二年（一八二九）刊、半紙本二卷二冊、施訓者は江戸時代末期の文人「一嚟道人」、遠山荷塘と目される。

本書は、清代に中国で出版された笑話集『新鐫笑林広記』（全十二卷四冊）所収の八二七話のなかから三〇五話を選録し、訓点、左訓、割注を施した訓訳本である。和刻本『訳解笑林広記』を注釈するにあたり、明清時代に中国で出版された以下の三つの笑話集を特に詳細に調査したので、それらの書誌を簡単に整理しておく。

一、『絶纓三笑』四冊（七二六話）、開口世人輯、聞道下士評、曼山館徐孟雅梓行、万曆四四年（一六一六）序。現存テキストは、東京大学文学部蔵本の一本。

二、『笑府』十三卷四冊（六〇〇話＋類話）、馮夢龍編、一六四六年までに成立か。現存テキストは、内閣文庫蔵本（『馮夢龍全集』第四一卷（上海古籍出版社、一九九三年六月）に影印あり）、筑波大学中央図書館蔵本（ウェブ公開）、武蔵禎夫先生旧蔵本（『笑府集成』（太平書屋、二〇〇六年三月）に影印あり）、大阪天満宮御文庫蔵本、荒尾禎秀先生蔵本（巻九までの三冊、ウェブ公開）の五本（同板）。なお、『笑府集成』の各話に附された通し番号は、四三頁の第五八話（実は、第五九話）以降、一話ずつずれている。これは、松枝茂夫訳『全訳笑府（上・下）』（東京、岩波書店、岩波文庫、一九八三年一月、二月）の番号に合わせたものだが、岩波文庫本には不備があり、第五八話以降、一話ずつずれている点に注意。

三、『新鐫笑林広記』十二卷四冊（八二七話）、遊戯主人纂輯、粲然居士參訂、乾隆二六年（一七六一）、宝仁堂刊。現存テキストは、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本、筑波大学中央図書館蔵本（刊記記載の封面を欠く）の二本。異板に、内閣文庫蔵本（乾隆四六年（一七八二）、書業堂刊）が三本（一本は封面を欠く）存する。「明清善本小説叢刊」（天一出版社、一九八五年五月刊）の影印は、内閣文庫本のコピー。なお、『新刻笑林広記』の現存テキストは、同治元年（一八六二）刊本（関西大学蔵）が最も古いものである。

## 凡例

本書は、それぞれの笑話について、原文（和刻本）、書き下し文、現代語訳、注、補注、余説により構成した。

原文（和刻本）は、原則として正字（旧字体）を用いたが、「荅（答）」「响（響）」「汗（汚）」「盃（杯）」「睹（観）」など、コンピュータによる文字入力が可能で異体字については、正字によらず、可能なかぎり原本の表記を保存することとした。

書き下し文は、常用漢字・歴史的仮名遣いにしたがったが、表外漢字は正字（旧字体）を用いた。書き下し文のルビは、歴史的仮名遣いを用いた。また、書き下し文は、原則として『訳解笑林広記』の訓点にしたがって作成したが、部分的に訓を改めたところがある。その場合は、その旨を注に明記した。

現代語訳、注、補注、余説は、原則として、常用漢字・現代仮名遣いを用いた。

原本『新鐫笑林広記』に附された句読点（。）が和刻本『訳解笑林広記』に附されていない場合は、本文および書き下し文に読点（、）で示し、句点（。）と区別した。割注は、本文とは区別し、「」内に記した。

『訳解笑林広記』の底本は、文政十二年（一八二九）、「東都書房 玉巖堂 發兌」の刊本（架蔵本）を使用した。なお、和刻本『訳解笑林広記』は、冒頭に原序三丁、目次二丁を附すが、本稿の最後に附載する予定である。

## 原文

### （外題）

譯解笑林廣記 一

### （見返し）

文政己丑新鐫

遊戲主人纂輯

一噓道人譯解

笑林廣記 全四冊

東都書房玉巖堂發兌

玉巖書堂發兌（朱印）

## 書き下し文

### （外題）

訳解笑林広記 一

### （見返し）

文政己丑新鐫

遊戲主人纂輯

一噓道人訳解

笑林広記 全四冊

東都書房玉巖堂發兌

玉巖書堂發兌（朱印）

## 注

○文政己丑＝文政十二年（一八二九）。○新鐫＝新たに板木を削ること。「鐫[juan]」は「板木を」けずる」意。唐本『笑林広記』のタイトルは、明代刊本「新鐫笑林広記」（内題）、清代刊本「新刻笑林広記」（内題）。○遊戲主人＝清代の人。本名不詳。『笑林広記』の編者。○纂輯＝編集。「纂[zuan]」輯[ji]、ともに「あつめる」意。○一噓道人＝遠山荷塘の号。「噓[xue]」は「わらう」意。「一噓道人」とは「お笑い仙人」ほどの意味である。遠山荷塘（一七九五～一八三一）は、陸奥の人。号は一圭、一噓道人は別号。豊後日田で広瀬淡窓に漢学を学び、長崎崇福寺で唐話・明清楽・月琴を習得した僧侶である。三一歳のとき、江戸で元曲『西廂記』・南戲（明代の長編戯曲）『琵琶記』などの中国戯曲作品を講じ、自ら楽器の製作にも携わった。三七歳で病没。朝川善庵「荷塘道人圭公伝碑」によれば、『北西廂記註釋』『月琴考』『胡言漢語考』の著書があったという。『諺解校注古本西廂記』（稿本）が現存し、「唐話辞書類集別巻」（汲古書院、一九七七年）に影印が収まる。また、「唐話辞書類集」第一集（汲古書院、一九六九年）に、白話辞書『胡言漢語』の影印が収まる。○全四冊＝原刊本（唐本）の冊数を記したのか、和刻本の書肆が四冊の刊行を予定していたのか、未詳。和刻本『訳解笑林広記』は二卷二冊、唐本『新鐫笑林広記』は全十二卷四冊。○玉巖堂發兌（朱印）＝別本に「京都横山街玉巖堂精選古今書籍發兌」（朱印）とあるもの、朱印のないテキストも存する。

## 補注

現在、中国国内で出版されている『笑林広記』関連書物の（管見の限り）すべての解説（専門書から中高生向け読本・啓蒙書の類に至るまで）に、現存最古の『笑林広記』テキストは乾隆四十六年（一七八二）書業堂刊本であると記されているが、実際には、それより二十年も早い乾隆二六年（一七六一）、宝仁堂刊のテキスト（京都大学附属図書館・谷村文庫蔵）が、現存最古のものである。これまでは、国立公文書館（内閣文庫）蔵本（三本）、またはその影印である台湾・天一出版社「明清善本小説叢刊」所収テキストが基本テキストとして用いられていたが、京大本によるべきである。ま

た、刊年記載の封面（見返し）は欠くものの、京大本と同板のテキストがさらに一本、筑波大学中央図書館にも存する。

京大本『笑林広記』の封面（見返し）の記事は、以下の通り。

乾隆二十六年仲夏

新鐫笑林廣記

古艶 腐流 術業 形體 殊稟 閨風

世諱 僧道 貪吝 貧窶 譏刺 謬誤

寶仁堂重梓

これにより、乾隆二十六年（一七六一）五月（仲夏）に蘇州の書肆「寶仁堂」から『新鐫笑林廣記』が「重梓」（再版）されていた、つまり、これ以前にも現在所在不明の初版本が出ていたことが窺える。

なお、わが国で初めて『笑林広記』の訳本（抄訳）が出版されたのは、安永七年（一七七八）である（伊丹椿園訳『笑林広記鈔』）。伊丹椿園が、『笑林広記』を翻訳する際に見ていた唐本テキストは、年代的に見て、乾隆二十六年（一七六一）宝仁堂刊本（京大本、筑大本）か、中国でそれ以前に刊行されていた所在不明本のいずれかである。これまで現存最古とされていた乾隆四十六年（一七八一）書業堂刊本（国立公文書館蔵、『明清善本小説叢刊』所収本）ではありえないことに注意すべきである。

なお、乾隆四十六年（一七八一）書業堂刊本（国立公文書館蔵）の封面（見返し）には、次のような記述がある。

乾隆辛丑年季秋、粲然居士參訂、新鐫笑林廣記、金閨書業堂梓行

これにより、書業堂刊本は、乾隆四十六年（一七八一）九月、「金閨」（現・蘇州）の書肆「書業堂」より出版されたものであることが分かる。乾隆二十六年刊本を出版した「寶仁堂」と同じ、「金閨」（蘇州）の書肆による刊行であった。

① 辞朝（朝廷を退出して象を見る）

原文

辞朝ゴシヨイトマゴヒ 朝見象マツリ。低徊留之チカヘ、不忍去シヤハズ。人間其故ニヒト。荅曰コナヤウニコエフクダカ。我レ想フ。

書き下し文

朝を辞す

一 教官 朝を辞して象を見る。低徊、これを留めて去るに忍びず。人、その故を問ふ。荅て曰く、我想ふに、祭丁の猪羊に、這般の肥大有れば便ち好けん。

現代語訳

ある先生、朝廷を退出し、帰り道に象を見た。行きつ戻りつしながらも、なかなかその場を離れない。理由を訊ねると、こう答えた。

「あのお、孔子廟祭の（お供え物の）豚や羊も、これぐらい大きくて太っていたらいいのになあと思ひまして。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部（二丁表）。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部（第六二話、二丁表）。○辞朝＝朝廷を退出すること。左訓「ゴシヨイトマゴヒ」（御所暇乞い）。○教官＝明清時代の中国において、教育機関に従事する役人の総称。府学には「教授」、州学には「学正」、県学には「教諭」、各補佐役として「訓導」が置かれた。左訓「ガクカウノセンセイ」（学校の先生）。○象＝明清時代、越南・シャム（タイ）等からしばしば北京の朝廷に献上されたという（松枝茂夫『全訳笑府（上）』五八頁）。日本においては、享保十三年（一七二八）六月、清国の商人によって、將軍吉宗への献上品として交趾国（ベトナム）から長崎に象がもたらされ、江戸まで輸送された（享保十四年五月二十五日江戸着）。そのときの模様は、「かわら版」（享保十四年五月、関西大学図書館蔵）をはじめ、『象のみつき』（享保十四年五月刊、西尾市石瀨文庫蔵）、『象志』（享保十四年五月刊、西尾市岩瀨文庫蔵）、『詠象詩』（享保十四年五月刊、関西大

補注

『笑府』第四九話（卷二腐流部）

教官辭朝

教官辭朝。見象。看之。不覺出神。人問之。荅曰。我想祭祀猪有這般大、便好。

余說

象を見て、あんなに大きな肉をたらふく食べたいと考える、貧乏教師のさもしさを笑ったもの。和刻本には採録されていないが、『新鐫笑林広記』第六五話「廝打」（巻二 腐流部、一丁裏）にも、肉を食べたがる教官の話がある（『笑府』第五一話「公子廝打」に類話が収録されている）。

教官の子どもは、いつも県丞の子と殴り合つては負けてばかり。家に帰つて、母親に泣きすぎる。母親は、「あの子は一日中、肉ばかり食べているから、あんなに

力が強いんだよ。お前ときたら、朝から晩まで豆腐しか食べていない、だから力が出ないのだよ。肉を食べないと、あの子に勝てっこないんだよ。」と言う。そこで教官は言った。「息子よ、それなら問題ないぞ。孔子廟祭が終わってから（お供え物の肉を食べてパワーアップしてから）、また仕返しをすればよいのじゃ。」

孔子廟祭で食べさせてもらえる肉が、常にひもじい思いをしている教官の家族にとっては、よほどの御馳走だったのであろう。ホルモンでもラードでも、なんでも構わないから、肉なら食べたいと思っていたのかもしれない。そんな教官がまるまると大きく太った象を見たら、ステーキをたらふくほおばる夢でも見てしまう、ということであろう。ちなみに、象を目にした教官の様子を、『笑林広記』は「低徊留之不忍去（行きつ戻りつしながらも、なかなかその場を離れない）」と記し、『笑府』は「不覺出神（思わずうつとり）」と記している。うつとりする気持ちも想像されよう。

次の『訳解笑林広記』第二話「争臓」(『新鐫笑林広記』第六四話)も、同じく孔子廟祭の肉にまつわる話である。

② 争臓そうぞう（ホルモンを奪い合う）

原文

争<sup>ハラフタ</sup>レフ<sup>タ</sup>臟<sup>ク</sup>ヲ  
 祭<sup>ハ</sup>一<sup>ツ</sup>丁<sup>ツ</sup>過<sup>ク</sup>ク。 両<sup>ハ</sup>廣<sup>ハ</sup>一<sup>ツ</sup>文<sup>セン</sup>争<sup>セイ</sup>ニ<sup>ツ</sup>一<sup>ツ</sup>猪<sup>ハ</sup>ノ<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>臟<sup>ワタ</sup>。 各<sup>ハ</sup>執<sup>ニル</sup>其<sup>ノ</sup>臟<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>一<sup>ツ</sup>頭<sup>ヲ</sup>。 一<sup>ツ</sup>廣<sup>ハ</sup>文<sup>セン</sup>稍<sup>シ</sup>強<sup>シ</sup>。 盡<sup>ク</sup>ク<sup>キ</sup>掣<sup>キ</sup>ニ<sup>ツ</sup>得<sup>テ</sup>タリ  
 ガクモ<sup>シ</sup>ン<sup>シ</sup>ヨ<sup>シ</sup>ノ<sup>ハ</sup>マ<sup>ハ</sup>ツ<sup>リ</sup>。 セン<sup>セイ</sup>。 ハ<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>フ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>。 ハ<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>フ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>。 ヒ<sup>ヒ</sup>ノ<sup>ノ</sup>サ<sup>サ</sup>ケ<sup>ケ</sup>。 シ<sup>シ</sup>ボ<sup>ボ</sup>キ<sup>キ</sup>ト<sup>ト</sup>ル<sup>ル</sup>。 ノ<sup>ノ</sup>ミ。

其<sup>ノ</sup>臟<sup>ヲ</sup>。 争<sup>フ</sup>者<sup>ヲ</sup>ノ止<sup>ム</sup>、 両<sup>ハ</sup>手<sup>ヲ</sup>ニ<sup>ツ</sup>拗<sup>ハ</sup>ル<sup>ル</sup>得<sup>テ</sup>臟<sup>中</sup>ノ油<sup>ヲ</sup>一<sup>ツ</sup>捧<sup>ツ</sup>而<sup>シテ</sup>已<sup>ム</sup>。 因<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>。 予<sup>レ</sup>雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>テ</sup>二<sup>ツ</sup>大<sup>サ</sup>堇<sup>ヲ</sup>「讀<sup>ム</sup>

作<sup>ス</sup>臟<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>」。 君<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>レ<sup>シ</sup>尤<sup>ニ</sup>「油<sup>ノ</sup>全<sup>ク</sup>音<sup>ヲ</sup>」焉<sup>ヲ</sup>。

書き下し文

臓を争ふ  
 祭り過ぐ。而広文一猪の大臓を争ふ。各その臓の一頭を執る。一広文稍強し。尽  
 予大葬「讀みて臓字と作す」を得ずと雖も、君尤「油と同音」無し。



現代語訳

孔子廟祭が終わり（お供え物の分け前にあずかるうとして）、二人の先生が豚のホルモンを奪い合っていた。両者それぞれホルモンの端っこをつかんだ。片方の先生のほうが少し力が強かったので、ホルモンをまるごとぐいと引き寄せた。もう一方の先生は、両手でホルモンの油をわずかに搾り取っただけだった。そこで（経書の言葉をもじって）こう言った。「我大いなるホルモンを得ずと雖も、君に豚の油なし。（我大いなる葬儀をなすこと能わずと雖も、君尤むることなかれ。）」

注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部（一丁表裏）。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部（第六四話、一丁裏）。○争臓＝左訓「ハラワタ」（腸）。○祭丁＝前出。左訓「ガクモンシヨノマツリ」（学問所の祭）。○広文＝「教官」のこと。左訓「センセイ」。唐代、天宝九年（七五〇）に「広文館」が設置され、「博士」「助教」等の職が設けられた。明清時代、教育機関に従事する「教官」は「広文」または「広文先生」と呼ばれた。古来「広文先生」とは、その貧乏暮らしを揶揄される存在であった（杜甫「醉時歌贈広文館学士鄭虔」。○一頭＝「一頭児」「一端」（一方の）端、端っこの意（俗語）。○掣[chè]＝引き寄せる。○勸[quān]＝（縄などで）きつく縛る、括（くく）ってぎゅっと締める。「勸得」、左訓「シゴキトル」。「勸」の旁を「勤」とするのは誤り。○一捧＝左訓「ヒトサ、ケ」。「捧[pěng]」は、両手ですくい上げたものを数える量詞（助数詞）。「一捧」は「ひとすくい」。○予雖不得大葬＝『論語』子罕篇（經典余師）「予縦と不得大葬」。予死於道一路乎。「大葬[dàzàng]」とは、本来「大夫の身分にふさわしい立派な葬儀」の意だが、（い）では同音語「大臓[dàzàng]」（大きな内臓、立派なホルモン）の意味で使用され、「私は立派なホルモン（立派な葬儀）を手に入れることはできなかったが」と言っている。○葬[àng]「讀作臓字」＝葬[zàng]（葬儀）は、同音字「臓[zàng]」（ホルモン）に読み換える、という意味。「葬」は「葬」の異体字。○尤[you]「油全音」＝「尤[you]」と「油[you]」は同音字である、の意。「全」は「同」の異体字。なお、「葬」「尤」二字に附された割注は、『訳解笑林広記』の施訓者・遠山荷塘によるものではなく、いずれも唐本『新鐫笑林広記』に備わる原注である。○君無尤焉＝『孟子』梁惠王下篇（『經典余師』）に、「曾子曰。戒之、戒之」

之ヲ出<sub>ニ</sub>乎爾<sub>ニ</sub>者ハ反<sub>ニ</sub>乎爾<sub>ニ</sub>者ナリ也。夫レ民今<sub>ニ</sub>シテ而<sub>レ</sub>後得<sub>レ</sub>リ反<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>也。君無<sub>レ</sub>尤<sub>ム</sub>コト焉」とある。ただし、「無尤」は「無<sub>レ</sub>尤」と訓み、「罪はない、非はない、間違いはない、誤りはない」という意味にもなる（『老子』第八章「上善<sub>ハ</sub>若<sub>シ</sub>水<sub>ノ</sub>」（中略）夫唯<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>争<sub>。故<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>尤<sub>トガ</sub>」など）。ここでは、「四書五経」風の言葉をもじりながら「葬（臓）」「尤（油）」という同音字を用い、文言（話しことばとは異なる古風な書きことば）で憎まれ口を叩いているところに滑稽味がある。最後の一言を丁寧（ていねい）に解釈すれば、次のようになる。「君に根こそぎ奪われたので」私の手元に立派なホルモンはないが、（私がぎゅっと搾り取ってやったので）君に豚の油（ラード）はない。「ホルモンの奪い合いに敗れた貧乏教師の負け惜しみが可笑しい。ちなみに、この捨てゼリフを経書風に解釈すれば、「私に立派な葬儀はできないが、あなたはそれを咎めてはならない。」となる。</sub>

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。豊橋創造大学蔵『繪圖真正増訂笑林廣記』（武藤禎夫先生旧蔵本）卷「冒頭に「争臓」の挿絵がある（一丁表）。そこには、一メートルほどの長さの細い豚の腸を二人の文士（教官）が引つ張り合う姿が描かれている。『繪圖真正増訂笑林廣記』（四巻四冊、袖珍本）は、「拈花一咲人」による「光緒丁亥春」（一八八七年春）の序文が附されたもので、現存本『笑林広記』テキストの中では極めて特異な体裁をもつ。本書所収話は、全七九七話（その他のテキストは、十二巻四冊、全八二七話）、話の配列もほぼ無作為である。「争臓」の本文は、巻二に収められている。

③ 鑽刺（おべつか使いとチクリ屋と）

原文

鑽刺「嘲<sub>ニ</sub>能做<sub>ニ</sub>趨奉<sub>ニ</sub>者<sub>ト</sub>」  
鼠<sub>ト</sub>與<sub>ニ</sub>黃蜂<sub>ト</sub>拜<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>兄弟<sub>ト</sub>。邀<sub>ヘ</sub>テ一秀才<sub>ヲ</sub>做<sub>ニ</sub>盟証<sub>ト</sub>。秀才<sub>ハ</sub>不得<sub>レ</sub>已<sub>。往<sub>ニ</sub>列<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>第三<sub>ト</sub>人<sub>ト</sub>。一友問<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。兄何<sub>ニ</sub>居<sub>ニ</sub>乎<sub>。鼠輩<sub>ノ</sub>之下<sub>ト</sub>。答<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>。他<sub>ハ</sub>兩個<sub>一ハ會<sub>ニ</sub>鑽<sub>ニ</sub>一ハ會<sub>ニ</sub>刺<sub>ニ</sub>ト</sub>」  
我<sub>レ</sub>只<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>讓<sub>ニ</sub>他<sub>ニ</sub>罷<sub>ト</sub>了<sub>。カレニマケネバナラス</sub>。</sub></sub>

## 書き下し文

鑽刺「能く趨奉を做す者を嘲る」

鼠と黄蜂と 拝して兄弟と為る。一秀才を邀へて盟証と做す。秀才已むことを得ず、往て列して第三人と為る。一友問て曰く。兄何んぞ鼠輩の下に居らんや。答て曰く。他兩個、一は鑽を会す。一は刺を会す。我只得 他に譲る。

## 現代語訳

ネズミがスズメバチと兄弟の契りを結んだ。秀才を一人連れてきて、盟友の証人になつてもらおうとした。秀才は仕方なく、末席を汚すことにした。ある友人が、

「貴兄はどうしてネズミなんぞの下座におられるのですか。」

と訊ねたところ、こう答えた。

「奴ら二人は、一人は穴を開ける(人に取り入る)のが得意だし、一人は針で刺す(人の欠点を暴く)のに長けている。だから私としては、あいつらの言うことに従うしかないんだよ。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上腐流部(一丁裏)。「新鐫笑林広記」巻之二腐流部(第六六話、一丁裏(二丁表))。○鑽刺Ⅱ左訓「トリイリマヘス」。「トリイリ」は「人に取り入ること」、「マヘス」は「麻痺させる」意か。本文中「刺」の左訓に「マヒス」とある。○「嘲」能く「趨奉者」Ⅱ人になまなく取り入るヤツを馬鹿にした話。この割注は原刊本にはなく、和刻本の施訓者・遠山荷塘による注である。○趨奉Ⅱ迎合する、こびへつらうこと。○黄蜂Ⅱスズメバチ。『笑府』第四〇話「鑽刺」は「蜂(ハチ)」とする。補注参照。○秀才Ⅱ「生員」。明清時代の科挙制度において、地方で行われる最初の試験に合格し、府・州・県の学校で学ぶことができるようになった者を、「生員」「秀才」「諸生」「廩生(廩膳生員)」などと称した。府・州・県から俸給と米を支給された(第五話「廩糧」参照)。○做盟証Ⅱ盟友の誓いを立てる証人となる。この前後、『笑府』原文は「固邀一秀才與盟(ぜひと秀才に盟友の仲間入りをしてもらいたい)」となっており、微妙に文意が異なる。○鑽Ⅱ穴を開ける。俗に「人に取り入る」意に用いる。ここは両方を掛けている。ネズミは壁に穴を開ける。ここでは、人にこびへつらう者を揶揄している。

ている。右訓「アナアケル」(穴開ける)、左訓「トリイリ」(取り入り)。○刺Ⅱ針で

刺す。俗に「人の欠点などを摘発する、暴き立てる、チクる」意に用いる。ここも両者の掛詞となっている。スズメバチは針で刺すものであり、ここでは「人の秘密を摘発する、チクる」存在として描かれている。右訓「サス」(刺す)、左訓「マヒス」(麻痺す)。『水滸伝』第四一回に「這黄文炳雖是罷閑通判、心裡只要害人。勝如己者妬之、不如己者害人、只是行歹事、無為軍都叫他做黄蜂刺。」「我知無為軍人民都叫你做黄蜂刺、我今日且替你拔了這個刺。」とあり、内情を暴き立てることによって人を陥れる卑劣な悪人を「黄蜂刺」(本名「黄文炳」と呼んでいる。なお、遠山荷塘が附した割注(第七二話「医銀入肚」、巻上・二三丁表)に「紙牌中寫梁山泊強盜宋江等」とあり、『水滸伝』の登場人物のイメージが荷塘の念頭に浮かんでいた可能性は十分に考えられる。○我Ⅱ我。『レ』は、所謂「捨て仮名」。○他Ⅱ彼。三人称単数の代名詞。現代中国語とほぼ同じ。ただし、近世語「他」に男女の区別はない。「レ」は「カレ」と訓ませるための「捨て仮名」。○只得Ⅱ罷了Ⅱ(俗語)Ⅱするしかない。訓読では対応しきれない構文である。「只得」は「ゼヒナク」と訓む例がある(『通俗醒世恒言』二、『忠義水滸伝解』一、『小説字彙』など、小田切文洋『明・清・唐話用例辞典』(笠間書院、二〇〇八年、五五九頁)参照)。「罷了」は現代語でもよく使われるが、訓読困難な語彙である。ここは遠山荷塘も訓読せず、「只得讓他罷了」の全文に「カレニマケネバナラヌ」(彼に負けねばならぬ)という左訓を附す。

## 補注

この話は、『笑府』第四〇話(巻二腐流部、五丁表)と同話だが、本文に異同がある。『笑府』の原文は以下の通り。日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』四八〇四九頁参照。

『笑府』第四〇話(巻二腐流部)

## 鑽刺

鼠與蜂約為兄弟。固邀一秀才與盟。秀才不得已。往列之行三。人問曰。公何以屈于鼠輩之下。答曰。他兄弟輩一會鑽。一會刺。我只索讓他罷了。

余説

国の禄を食む「穀潰し」の「秀才(諸生、廩生、生員)」どもが(第五話「慶糧」参照)、人に取り入る「おべつか使い」や、人を陥れる「黄蜂刺」(『水滸伝』の悪役)などにも頭の上がらない、不甲斐ない存在にすぎないことを嘲った話。科挙の第一試験に合格した「秀才」たちは、将来を期待される幹部候補生には違いなからうが、ともに働きもせず、受験勉強をしながら俸禄を支給される「恵まれた」身分の人間であったため、一般庶民からは目の敵にされたのであろう。

④ 贄礼(謝礼と土下座と五十文)

原文

贄禮

廣文到任。門人以錢五十為贄者。題刺曰。謹具贄儀五十文。門人某百頓首拜。師書其帖而返之曰。減去五十拜。補足一百文。何如。門人答曰。情愿二百五十拜。免了。這五十文又何如。

書き下し文

贄礼

廣文到任す。門人、錢五十を以て贄と為す者あり。刺に題して曰く。謹みて贄儀五十文を具す。門人某、百頓首拜、と。師、其の帖に書して、これを返して曰く。五十拜に減じ去り、一百文に補足せば、何如、門人、答て曰く、情愿す、二百五十拜にして、這の五十文を免了せば、又何如、

現代語訳

先生が学校に赴任した。学生は、先生への謝礼として、錢五十文を払おうとした。書付には、次のように記した。

「謹んで謝礼五十文を御用意いたします。門人某、頓首百拜(百回土下座をいたします)。」

先生はそこに二言書き添え、学生に返しながら言った。

「『土下座マイナス五十回、謝礼プラス五十の計百文』、これでどうだい。」

学生は答えた。

「どうかお願いでございます。土下座を百五十にして、謝礼五十文をゼロにする、というのは如何でしょう。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部(二丁裏)二丁表。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部(第六九話、二丁裏)。○贄礼「贄儀」。初対面のときに持参する贈り物、謝礼。目上の人に拝謁する際、謝礼を贈るのが礼儀であった。明・無名氏『鳴鳳記』第四齣「嚴崇慶寿」に「下官久有此心。無由進見。且進見之時。必有贄礼。若不投其所好。怎得重用。」とある。○廣文「教官」、先生のこと(前出、第二話「争臓」)。○到任「新任教員が」着任すること。左訓「クハンニツク」(官に就く)。○刺「名前を記した名刺、挨拶の言葉などを記した書付のこと。左訓「ナフダ」(名札)。○具「用意する。○文」銅銭を数える単位。銅銭一枚が一文。銅銭の中央に四角い(方)穴(孔)が開いていたため、銅銭のことを「孔方錢」とも呼んだ。中国では、一九一二年の清朝滅亡とともに廃止された。江戸時代後期の貨幣価値で計算すると、一文「約三十円、五十文「約二五〇〇円となる。だいたい四六蕎麦二杯分の金額である。○百頓首拜「百回、頭を地面に押し当てること。書簡用語「頓首再拜」を變形させたもの。漢・蔡邕『被収時表』に「議郎龔士臣、邕、頓首再拜、書皇帝陛下。」、清・俞正燮『癸巳存稿』「明帖」に「明、洪武三年、礼部定儀、敵已、止奉書奉復。而文人往往称頓首、称再拜、蓋由臨古帖而勦襲之。」とある。明清時代には「百頓首拜」も所詮は書面上の社交辞令にすぎず、実際に土下座をしていた訳ではあるまい。それをこの貧乏教師は、謝礼の額を釣り上げるための口実として、五十拜を五十文に換算したところが実に浅ましく、可笑しい。またこの学生の、「それなら謝礼の五十文をゼロにして土下座百五十回分に換算してくれ」という即座の対応も気が利いている。○減去五十拜「補足」(「減去」は「減」に「去」を添えて「減去」の意。五十拜を減らし、その分を謝礼に補い足して、百文とする)と訓むべきところ。文字で書いて示したという設定であるため、文言(書き言葉)らしく、五言二句に字数が整えられている。○情愿「心から願う。『愿』は「願」の異体字。左訓「ドウゾシテ」(どうぞお願いですからしててください)。



## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

## 余説

またしても、お金に目がないケチで貪欲な先生の話。

なお、学生が示した書付の文章は、次のような七言二句になっている。

謹具贊儀五十文。門人某百頓首拜。

また、それに合わせて先生が補筆した二句も、五言で整えられている。

減去五十拜。補足一百文

本文を中国語で音読すれば七言と五言のリズムを肌で感じ取ることができるが、訓読の際には原文のリズムが失われるため、常に注意して味わいたい。

## ⑤ 廩糧 (扶持米：国の禄を食むへツピリ書生どもを馬鹿にした話)

## 原文

廩糧「嘲放屁諸生ノ吃廩糧者」

糧長「收糧在倉廩内、耗鼠甚多、潜伺之、見黃鼠群食其中、開倉掩捕、黃鼠有護身屁、連放數個、里長大怒曰、這樣放屁畜生、也被他吃了了糧」

(眉批) 畜生与諸生音相近

## 書き下し文

廩糧「放屁諸生の廩糧を吃する者を嘲る」

糧長糧を収め倉廩内に在り、耗鼠甚だ多し、潜にこれを伺ふ、黄鼠のその中に群食するを見る、倉を開て掩捕す、黄鼠に護身屁有り、連りに數個を放す、里長大に怒りて曰く、這樣的放屁畜生、也た他に糧を吃了し去らる、

(眉批) 畜生と諸生と音相近し

## 現代語訳

俸禄米(年貢)の管理者、扶持米を倉庫に収めた。ネズミが余りに多かったので、中を覗いてみると、イタチが群がって米をむさぼり食っていた。倉庫を開けて捕まえようとすると、イタチは続けて何発も最後つ屁を放った。庄屋はカンカンに怒って言った。「こんな臭い屁をするケダモノたちにまで(こんなへツピリ書生たちにまで)、扶持米を食われてしまうとは!」

## 注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部(二丁表)。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部(第七二話、三丁表)。○廩糧＝「廩膳」「廩食」「廩禄」、官給の食禄。科挙の最初の試験に合格した者は、国から米を支給された。国の禄を食む者を「廩膳生(員)」「諸生」と呼んだ。「糧」は「糧」の異体字。左訓「フチマイ」(扶持米)。江戸時代の武士が俸禄として受け取っていた米を「扶持米」という。○嘲放屁諸生ノ吃廩糧者(割注)＝へツピリ「諸生」どもが国の禄を食んでいるのを嘲つたもの。「諸生」は「秀才」「生員」「廩膳」などと同じ。俸禄を受けながら科挙の受験勉強を続ける書生のこと。役に立たない「穀潰し」と見なされることも多かった。○糧長＝明清時代、俸禄米の管理者を「糧長」と言った。江戸時代の「庄屋」「名主」に相当する。左訓「ネンカ、リノ庄ヤ」(年貢係の庄屋)。○耗鼠＝「耗子[haozi]」「老鼠[lǎoshǔ]」、ネズミのことであろう。ただし、『笑府』『絶纓三笑』では「耗」を「減る」という意味で使用しており(「怪其日耗(その日に耗するを怪しむ」に日に米が減っていくのをおかしいと思ひ)」、「減る」という意味の語「耗」が「耗子(ネズミ)」という語の連想に引きずられて生じた誤伝の可能性はある。漢語では通常ネズミのことを「耗鼠」とは言わないからである。○掩捕＝捕らえる、つかまえること。左訓「トラマヘル」(捕まえる)。○護身屁＝(イタチの)最後つ屁。イタチやスカンクは、危険から身を守るために、肛門から強烈な悪臭をともし分泌液を放出し、敵が悪臭にひるんだ隙に逃げる。左訓「サイゴヘ」(最後屁)。○這樣(口語[zhèyàng])＝このように、このような。「かやうに」という訓みもあり得るが、和刻本にフリガナはない。○放屁畜生＝「放屁」も「畜生」も「バカ野郎」「この野郎」などという言い方に近い罵詈雑言だが、本来「放屁」は「屁を放つ」、「畜生」は「禽獸」「動物」「ケダモノ」のこと。左訓「タハケモノ」(たわけ者)。



○畜生与諸生音相近（眉批）「畜生[chùshēng]」と「諸生[zhūshēng]」とは発音が近い、という意味。「畜生（ケダモノ、バカ野郎）」は「諸生（国の禄を食んでいる書生たち）」の掛詞になっていることを指摘したもの。なお、「眉批」とは、漢籍において「上段欄外に附された注や批評（頭注）」のことをいう。この「眉批」は、唐本『新鐫笑林広記』にはなく、和刻本の施訓者、遠山荷塘によるものである。○也（口語[と]）も（また）。

## 補注

（この話は、『笑府』第三五話（卷二腐流部、三丁裏／四丁表）、『絶纒三笑』第三八九話（卷三、時笑・影語二七、一三丁表／裏）と同話だが、本文に異同がある。それぞれの原文は以下の通り。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』四四～四五頁参照。

## 『笑府』第三五話（卷二腐流部）

又（喫糧）

糧長収糧在倉。恠其日耗。潜視之。見黃鼠羣食其中。

亟開倉掩捕。黃鼠有護身屁。放之不已。大怒曰。這樣放屁的畜生。也吃了我糧去。

## 『絶纒三笑』第三八九話（卷三、時笑・影語二七）

喫糧

糧長收糧在倉。怪其日耗。潜伺之。見黃鼠羣食

其中。亟掩捕。黃鼠有護身屁。放之不已大怒曰

這樣放屁的畜生也喫了我糧去

黃鼠有護身屁可以喫糧。麋生亦有護身文

可以利考

『絶纒三笑』には、末尾に次のような対句仕立ての評語がある。

イタチには自分の身を守る最後つ屁というものがあり、それによって扶持米を食う

ことができる。また、麋生（諸生、秀才、生員）にも自分の身を守る文章というものがあ、それが試験の際の役に立つ。

## 余説

和刻本『訳解笑林広記』巻上の二丁表から六丁裏までは、句点（、）が附されていない。書肆による打ち損じであろうか。唐本『新鐫笑林広記』（乾隆二六年五月、宝仁堂刊本、京大本）には全文に句点（、）が切られており、和刻本もこの五丁分以外の箇所は、唐本に合わせて句点が附されている。なお、清代刊本『新刻笑林広記』に句点はない（白文）。

## ⑥野味（鳥肉）

## 原文

野味「禽獸謂之野味」

甲乙二士應試。甲曰、我夢一木冲天而何如、乙曰、一木冲天乃未字也、恐非佳兆、因言己夢一雉貼天而飛、此必文明之象、穩中無疑矣、甲搖首曰、咦、野「也」全音「味」也「未」全音「味」。

## 書き下し文

野味「禽獸これを野味と謂ふ」

甲乙二士試に應ず、甲曰く、我一木天に冲するを夢む何如、乙曰く、一木天に冲する乃ち未の字なり、恐らくは佳兆に非ず、因て言ふ己一雉天に貼じて飛ぶを夢む、此必ず文明の象、穩中疑ひ無しと、甲首を揺して曰く、咦、野「也」と同音「味」「未だしと同音」なり、

## 現代語訳

甲乙二名は（科擧の）試験を受けた。甲が言う。

「私は一木が天を衝く夢を見た。これは（夢判断として）どういうことだろう。」

乙が言う。

「一木が天を衝く」とは、『未』の字形を示している（意味は「未だし（＝まだ合

格しない」)。おそらく吉兆ではなからう。私自身は、一羽のキジが天にぴたり張り付いて飛ぶ夢を見た。これこそ文徳が明らかになる驗（合格の予兆）だろう。十中八九、合格するに違いない。」

甲は首を横に振って言った。

「いやいや、(キジは鳥だから)『野味[yěwèi] (=鳥肉)』、つまり『也未[yěwèi] (=お前も、まだ)』ということだ。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上腐流部(二丁表裏)。『新鐫笑林広記』巻之二腐流部(第七五話、三丁裏、四丁表)。○野味≡狩獵しゅりやうの獲物としての肉類。『水滸伝』第二回、第一一回、第三回、第六六回に用例がある。左訓「トリ」(鳥)。○(野味)禽獸きんぶつ謂之野味ト「禽獸」のことを「野味」という。この割注は原本にはないもの、つまり遠山荷塘の附した語注である。○一本冲天≡一本の木が(まっすぐ上に飛び上がって)天を衝く。「冲」は、「衝」と同意(現代中国語では「衝」の簡体字として「冲」を用いる)。「史記」「滑稽列伝」に「国中有大鳥、止於王之庭、三年不飛、又不鳴、王知此鳥何也、王曰、此鳥不飛則已、一飛冲天、不鳴則已、一鳴驚人。」とある。つまり、「三年間、飛ばず鳴かずであつても」一飛冲天(「たたび飛ばば天を衝す」ひとたび大空に飛び上がれば、天まで届く)と記されている。一本の木が天まで届くのと、一羽の鳥が天まで飛び上がるのと、視覚的なイメージは同一である。○穩中≡十中八九、合格する。「穩[wěn]」は「きつ」と「間違ひなく」、「中[zhōng]」は「(試験に)合格する、受かる」意。左訓「アタル」(当たる)。和刻本は「中」に去声(現代音では第四声に相当)の圈發けいはつ(右上の四声点)を附す。○咦≡いやあ、いやいや(そうではあるまい)。「咦[yí]」は、驚きと訝りを表す感嘆詞。左訓「イ、ヤ」。○(野)也ト全音≡「野[yě]」は「也[yě]」と同じ発音である、という意味。「野」に附された割注は、中国原本に存する原注である。○(味)未シ全音≡「味[wèi]」は「未[wèi]」と同じ発音である。つまり、甲の最後の言葉は、「(雉の夢を見たということは、鳥肉の夢なので)『野味(鳥の肉)』≡「也未(あなたも、まだ合格ではない)」ということだ」の意。

## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

## 余説

科挙の試験を受けたばかりの受験生が、気になる合否判定を夢判断で占おうとした話。中国語の同音語(「野味[yěwèi]」≡「也未[yěwèi]」)を使った中国的ダジャレである。和刻本『訳解笑林広記』の収録話には、この手の中国的ダジャレが非常に多い。

## ⑦ 僧士詰弁 (和尚と秀才が言い争う)

### 原文

僧士詰しきつべん辨べん 秀才詰しゅうさい問し和尚しやうかう曰、你們經典、内南無二字、只應念二本音、為何念作那摩、僧亦問云、相公四書上於戲二字、為何亦讀作嗚呼、如今相公若讀於戲、小僧就念南無、相公若是嗚呼、小僧自然要那摩、

### 書き下し文

僧士詰しゅうしきつべん弁べん 秀才しゅうさい和尚しやうかうに詰問して曰く、你們經典の内南無の二字、只應に本音に念むべし、為何念じて那摩と作す、僧亦問て云く、相公四書の上於戲の二字、為何亦讀みて嗚呼と作す、如今相公若し於戲と読まば、小僧就ち南無と念ぜん、相公若し是嗚呼ならば、小僧も自然に那摩ならんを要す、

### 現代語訳

秀才が和尚に問いた。 「あなたが御経に出てくる『南無』という二字を本来の発音通りに([nanwú]と)読むべきです。どうして『那摩[namó]』と読むのですか。」

すると僧侶も聞き返した。 「それじゃあ旦那さん、あんたらは四書(『大学』『中庸』『論語』『孟子』)に出てくる『於戲[yúxì]』の二字を、どうして『嗚呼[wūhū]』と発音するのじゃ。今、

旦那さんが「於戲[yúxì]」と読むのなら、拙僧も「南無[nánwú]」と読む。だが旦那が（本来の漢字音とは異なる慣用音に従って）「嗚呼[wūhū]」と読むのなら、わしも当然「那摩[nàmó]」と読む。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部（二丁裏）。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部（第七六話、四丁表）。○詰辨＝「詰辯」「辯論」「対質」、互いに言い争う。原本「詰辯」、和刻本「詰辨」に作る。「辯[biàn]」「辨[biàn]」は音通、常用漢字では略体「弁」を用いる。左訓「イサカイ」（諍い）。○南無＝浄土宗で唱えられる「南無阿弥陀仏（阿弥陀仏に帰依する、という意味）」の最初の二字。中国語で音読するとき、本来の字音[nánwú]ではなく、慣用的に[námó]と発音される（「南無阿弥陀仏[námó'ēmituó]」）。○相公[xiànggōng]＝若旦那、旦那さん。明清時代の読書人に対する呼称、特に「秀才」に対して用いられた。なお、近代中国では、妻が夫を呼ぶときにも使用された。○於戲＝「嗚呼」、ああ（感嘆詞）。『礼記』『大学』に「詩云。於戲。前王不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>。君子<sub>ハ</sub>賢<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>賢<sub>ニ</sub>而親<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>親<sub>一</sub>。小人<sub>ハ</sub>樂<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>樂<sub>ニ</sub>而利<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>利<sub>一</sub>。此以<sub>テ</sub>没<sub>レ</sub>世<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>也」(和刻本『四書集註』(元禄五年(一六五二)刊)による)とある。中国でも日本でも、「四書」は朱子の注(『四書集註』)で読まれた(朱子が整理したものを「四書」という)。朱子の注に「於戲。音嗚呼。(「於戲」は「嗚呼[wūhū]」と発音する)」とある。漢文訓読では、「於戲」は「嗚呼」と同様に「ああ」と訓まれた。なお、『四書集註』に附された左寄りの連字符号(「於<sub>レ</sub>戲」)は、訓読みの熟語(音読しない語)であることを表す。

補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

かたや坊さんが御経を読むときの漢字音、かたや学生が古典漢文を読むときの漢字音、どちらも通常の漢字音とは異なる音で読まれるが、このように習慣的に読み習わされている「慣用音」は、どちらも今さら変更することのできぬものであることを指

摘している(儒者による仏教批判が当たらないことをほのめかしているのかもしれない)。儒者側の言い分は、御経の文句「な<sub>〇</sub>むあみだぶつ」を「な<sub>〇</sub>んむあみだぶつ」に変えろと言っているに等しく、それがナンセンスであることは、儒者の古典的な経典(『』)では「大学」に見える「於戲[wūhū]」の読み方を変えられないのと同じだと言っているのである。

また、小さなことだが、最後の坊さんの言葉「如今相公若<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>於戲<sub>一</sub>小僧就<sub>ニ</sub>念<sub>ニ</sub>南無<sub>一</sub>(今、旦那さんが「於戲[yúxì]」と読むのなら、拙僧も「南無[nánwú]」と読む。)」に見える「於戲」に附された和刻本の訓点「於戲」は「於戲」の誤りである。あんたも本来の漢字音「オギ」と読むなら、わしも本来の漢字音「南無」と読んでやろうじゃないか、と本来の漢字音をここでは示さなければならぬからである。日本語で訓読しようとしたために、混乱してしまったのであろう。

なお、この話もまた、中国語で音読しなければ意味の通りにくいものであり、このような中国語音がらみの笑話を日本人向けに選んだ和刻本『訳解笑林広記』の選者・遠山荷塘の意図を考えさせられる。当代きつての中国語学者であった遠山荷塘は、自身の語学者としての本領を発揮しなかったものであろうか。この話は、かなり「中国通」向けの話(伝統的な漢文訓読だけでは味わにくい話)であると言えよう。

⑧楊相公(楊の旦那)

原文

楊相公

一人問曰、相公尊姓、曰楊也。其人曰、既是羊ナラハ、為甚無<sub>レ</sub>角、士怒曰、獸<sub>ノ</sub>狗<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>的、那人錯<sub>ニ</sub>會<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>意<sub>一</sub>曰、嗟<sub>一</sub>「錯<sub>ニ</sub>會<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>母狗腹中<sub>一</sub>出来<sub>ニ</sub>的<sub>一</sub>」、

書き下し文

楊相公

一人問ひて曰く、相公の姓は、曰く姓楊なり、其の人曰く、既<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>羊<sub>一</sub>ならば、為<sub>ニ</sub>甚<sub>一</sub>角無<sub>レ</sub>き、士怒つて曰く、獸<sub>ノ</sub>狗<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>的、那人其の意を錯<sub>ニ</sub>り會<sub>ニ</sub>して曰く、嗟<sub>一</sub>「母狗の腹中より出来ると謂ふと錯<sub>ニ</sub>り會<sub>ニ</sub>す」

## 現代語訳

ある人が訊ねた。

「旦那さんのお名前は何とおっしゃるのですか。」

「楊と言います。」

するとその人は言った。

「羊というからには（羊と同じように角が生えているはずなのに、旦那さんには）

どうして角が生えていないのですか。」

楊さんはカンカンに怒って言った。

「このボケなすの狗野郎め（ボケなすの狗野郎から生まれたのだ）。」

その人は、楊さんの言葉の意味を勘違いしてこう言った。

「えっ？ なんですと！（旦那さんは、ボケなすの狗野郎と交尾して生まれた（だから角の生えていない）羊のヨウさんなのですか。）」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上腐流部（二丁裏～三丁表）。『新鐫笑林広記』巻之二腐流部（第七七話、四丁表）。○相公＝若旦那、旦那さま、「秀才（科挙受験生）」に対する尊称（前出、第七話「僧士詰弁」）。○姓楊＝名前（名字）は「楊」である。「楊[Yang]」（姓）と「羊[Yang]」（ひつじ）は同音。○既＝是＝「既是[jishi]」「既然[jiran]」（すでに）であるからには、現代中国語と同じ用法。○為甚[weishen]＝「為甚麼」「為什麼[weishenme]」（どうして、なぜ）、理由を問う疑問詞。○默狗入出的＝「バカ犬の腹に入って、そこから出てきたヤツ」というのが文字通りの意味だが、「バカ野郎」「こん畜生！」の類、人を罵るときに用いられるが、かなり下卑た表現である。現代中国語でも「狗養的」「狗日的」「狗日們」「狗入的」「狗生的」「狗鬼子」などと言う。「日[ri]」「入[ru]」は俗に「交尾する」意。「默[mo]」は「バカ」「アホ」の意、簡体字では「呆」を用いる。科挙の第一試験に合格した「秀才（諸生、生員）」の楊さんは、自分の名前を「羊」と間違えられたことに腹を立て、相手を下品な言葉で「バカ野郎！」と罵ったのである。右訓「バカイヌノマタカラデタヤツメ」（バカ狗の股から出た奴め）、左訓「ベラボウメ」。○噫[ai]＝「啊[ai]」（えっ、なんと）、驚いたり疑問に思ったときに、「えっ？」と聞き返す感嘆詞。右訓「や」、左訓「オヤオヤ」。○錯下會

謂中フト從ニ母狗腹中「出来的上」（割注）＝母狗のお腹から出てきたと言ったのかと誤解した、という意。この割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注である。「秀才」の罵り言葉を文字通りに受け取り、「えっ？ あなたは『羊のヨウさん』だけど、狗のお腹から出てきたんだって？ おやおや。」と解釈したことを示している。

## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

## 余説

文字を知らない無教養な人間に、自分の名前「楊[Yang]」を「羊[Yang]」と勘違いされたことに腹を立て、「バカ狗野郎の生まれ損ない（默狗入出的）！」と相手を下卑た言葉で罵ったところ、今度は「バカ狗が交尾して生まれた（角の生えていない）羊のヨウさん」と、さらに滅茶苦茶に勘違いされてしまったという笑い話。笑いの質としてはかなり低俗であるが、またしても荷塘好みの中国語音絡みのネタである。

## ⑨識氣（臭いで分かる）

## 原文

識氣「嘲秀才之放屁文章」

一瞎子雙目不明、善能聞香、識氣、有秀才一、拿一西廂本、與他聞、曰、西廂記也、問、何以知、之、答曰、有些脂粉氣、又拿三國志、與他聞、曰、三國志、又問、何以知、之、答曰、有些刀兵氣、秀才以為奇異、却將自做的文字、與他聞、瞎子曰、此是你作的佳作、問、你怎知、答曰、有些屁氣、

## 書き下し文

氣を識る「秀才の放屁文章を嘲す」

一瞎子 双目 明らかならず、能く香を聞き、氣を識るに善し、秀才有り 一つの西廂の本を拿つて他に聞かしむ、曰く、西廂記なり、何を以てこれを知ると問へば、答て曰く、些かの脂粉の氣有り、又三國志を拿して他に聞かしむ、曰く、三國志なり、



また何を以てこれを知ると問ふ、答て曰く、些かの刀兵の氣有り、秀才以て奇異と爲し、却つて自ら做るの文字を將て他に聞かしむ、瞎子曰く、此は是、你の佳作なり、問ふ、你、怎ぞ知る、答て曰く、些かの屁の氣有り、

## 現代語訳

ある盲人、右目も左目も見えなかったが、よく臭いを嗅ぎ分け、その性質を見分けることができた。ある秀才、『西廂記』一冊をその男に嗅がせてみると、(ずばり)

「西廂記です。」

と言った。

「どうして分かったんだ。」

と訊ねると、

「少し紅と白粉の臭いがしたものですから。」

と答える。次に『三国志』を持ってその臭いを嗅がせてみると、(またしてもずばりと)

「三国志です。」

と言う。同じく

「どうして分かったのだ。」

と聞くと、

「少し焦臭い武器の臭いがしたものですから。」

と答えた。秀才は、これは不思議なことだと思い、今度は自分で作った文章をその男に嗅がせてみた。すると、その盲人、(やはりずばりと)

「これはあなたの文章ですね。」

と言う。

「なんで分かったのだ。」

と聞いたところ、

「ちよつぴりおならの臭いがしたものですから。」

と答えた。

## 注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部(三丁表)。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部(第八〇話、

四丁裏)。○聞<sup>レ</sup>香<sup>ヲ</sup>識<sup>ル</sup>氣<sup>ヲ</sup> 〓 臭いを嗅いで、雰囲気(ムード)を読み取る。「香」「氣」は、ともに「香り」「臭い」の意。文字が読める(教養がある)ことを「識字[shìzì]」と言うことから、「識字」をもじって「識氣[shìqì]」と言った。○「嘲<sup>ス</sup>秀才<sup>ノ</sup>之放屁文章<sup>ヲ</sup>」(割注) 〓 秀才の胡散臭い文章を馬鹿にした話。「放屁[fàngpì]」は「放屁[fàngpì]」の誤り。「放屁(ヘッピー)」は罵語、前出(第五話「慶糧」)。この割注は、遠山荷塘によるもので、中国原本にはない。○一瞎子 〓 一人の盲人。「瞎[xi]」は「目の見えない人」「めしい」のこと。左訓「メクラ」。○聞<sup>レ</sup>香<sup>ヲ</sup> 〓 臭いを嗅ぐ。○聞[wén]は「(鼻で臭いを) 嗅ぐ」「におう」意、現代中国語の用法と同じ。○西廂記 〓 元代の戯曲。王実甫の作。和刻本『訳解笑林広記』の施訓者・遠山荷塘には『諺解校注古本西廂記』五卷五折の著作があり(未刊)、その稿本の影印が『唐話辞書類集(別巻)』に収められている。荷塘は江戸で元曲『西廂記』を講じていた。『西廂記』は「才子佳人もの」の代表作。張生という書生が、下女「紅娘」の手引きによって塀を乗り越え、恋する鶯鶯の部屋に忍び込むくだりは特に有名。まさに艶っぽい「紅」と「白粉」の香り立つラブストーリーである。○脂粉 〓 紅と白粉。○三国志 〓 中国明代の白話小説『三国志演義』。羅貫中の作。江戸時代の日本においても、元禄二く五年(一六八九く九二)に『通俗三国志』(「通俗物」と呼ばれる日本語訳)が出版され、江戸時代全体を通じて、極めてよく読まれた。中国白話小説が大流行する近世中期(一八世紀半ば)以前に、すでに多くの読者を獲得していた。

## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

## 余説

「秀才」の作文が屁のように「くさい」ことを笑ったもの。

⑩ 蛙帽 (虫に食われた帽子)

## 原文

蛙帽

有<sup>二</sup>盛大盛<sup>一</sup>者<sup>一</sup>、所戴<sup>ク</sup>毡帽、合<sup>シテ</sup>放<sup>二</sup>一處<sup>一</sup>、一被<sup>シテ</sup>虫蛙、兄弟二人互<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>

マウゼンノガシ

シラミガタカ

タカヒニ

推一競ス、各認テ其ノ不レ蛀者ヲ奪レ之ヲ、適、一士經過、以テ其ノ讀書ノ人明ナラ理ニ、  
 請レ彼二決之ヲ、士執ニ蛀帽ヲ反覆細看シ、乃睨ニ盛大ヲ曰ク、此ハ汝帽也、問ニハ  
 何ヲ以テ見得ニタリト、士曰ク、豈ニ不聞大學ノ註解云ク、宣「作先」著「作蛀」盛大  
 之貝也「帽ト全音」、

## 書き下し文

## 蛀帽

盛大盛二といふ者有り、戴く所の氈帽、合して一処に放く、一つは虫蛀せらる、  
 兄弟二人互相に推競す、各其の蛀ならざる者を認めてこれを奪ふ、適たま一  
 士經過す、其の讀書の人理に明なるを以て、彼に請ふてこれを決す、士蛀帽を執  
 て反覆細看し、乃ち盛大を睨して曰く、此は汝が帽なり、何を以て見得たりと問へ  
 ば、士曰く、豈に聞かずや 大学の註解に云く、宣に「先に作る」著は「蛀に作る」  
 盛大の貌「帽と同音」なり、

## 現代語訳

盛大、盛二という兄弟は、自分のフェルト帽を一緒に同じ場所に置いていた。とこ  
 ろが、帽子の一つが虫に食われてしまったため、兄弟二人は、虫に食われていないの  
 が自分の帽子だと、お互いにそれぞれ言い張った。そこへ折よく、一人のインテリが  
 通りがかった。教養のある知識人ならば、ものの道理が分かっているに違いないから、  
 この人に判定してもらおうということになった。そのインテリ、虫食いの帽子を手  
 取って、ためつすがめつ、じっくり眺めてから、兄の盛大を睨みつけてこう言った。

「これはあなたの帽子だ。」

「どうしてそんなことが分かるのですか。」

と訊ねると、

「君は知らないのかい。『大学』の注に、次のように書かれている。『先に虫が食う  
 のは、盛大の帽子である（『詩経』に見える「赫喧」という言葉は）「キラキラ  
 として、見事なさま」という意味である。』とな。」

と答えた。

## 注

○「訳解笑林広記」巻之上腐流部（三丁表裏）。『新鐫笑林広記』巻之二腐流部（第  
 八一話、五丁表）。○盛大盛二＝「盛[Sheng]」という名字の家の長男と次男にありが  
 ちな名前。中国における、盛家の「太郎」「次郎」というような命名法である。すぐ  
 後にも「兄弟二人」と記されている。○毡帽[zhanmao]＝羊などの毛で作った中折れ帽、  
 フェルト帽のこと。「毡」は「氈」の異体字、現代中国語（簡体字）では「毡」を用いる。  
 左訓「マウセンノボシ」（毛氈の帽子）。○合放一處＝一カ所に（帽子を）重ねて置い  
 ておいた。『笑府』は「遇暑月。同置一所。」（猛暑の夏に、同じ場所に置いておいた。）  
 『絶纓三笑』は「遇暑月。杳放一處。」（猛暑の夏に、重ねて一カ所に置いておいた。）  
 とする。「放[fang]」は「置く」意。現代中国語と同じ。和刻本は「放」に右訓「ヲク」（置  
 く）を附す。○一被虫蛀＝一つの帽子は虫に食われた。左訓「シラミガタカル」（虱  
 が集る）。○互相[huxiang]＝互いに、相互に。現代中国語と同じ。左訓「タカヒニ」  
 （互いに）。○推競＝（互いに、虫に食われた帽子は自分のものではないと、相手の方  
 に）競って押しやる、という意。「推[tui]」は、手で押すこと。左訓「ナスリツケル」。  
 ○認[ren]＝「認做」「当做」「看作」「認為」（～と考える、～と見なす、～とする）。  
 「みとめる」という訓とは、ややニュアンスが異なる。ここでは「どちらが自分の帽  
 子だったか分からないくせに）虫に食われていない帽子の方を自分のものだと考え  
 て（見なして）」の意。左訓「ミトメテ」（認めて）。○決＝「裁決」（是非を裁定する、  
 裁く）。左訓「サバク」（裁く）。○見得[jiande]＝分かる、見なせる、思われる（口語）。  
 ○大學ノ註解＝朱子による「大学章句」の注釈書『四書集註』を指す。○宣「作先」  
 著「作蛀」盛大ノ之貝也「帽ト全音」＝「先に虫食ったのが盛大の帽子である（先  
 蛀盛大之帽）」というのが、通りすがりの士人の解釈。本来、朱子の注は、「『詩経』  
 の言葉「赫」喧は）キラキラとして、見事な様子という意味である（宣著盛大之貌）」  
 と解釈すべきもの。元禄五年（一六五二）刊の和刻本『四書集註』巻一（五丁表）には、  
 「赫喧。宣著盛大ノ之貌」という訓点が施されている。「宣[xuan]」と「先[xian]」、  
 「著[zhu]」と「蛀[zhu]」「貌[mào]」と「帽[mào]」は、いずれも同音または類似音。  
 ここに示したのは現代中国語（普通話）の発音だが、清代の南京官話や蘇州方言でも、  
 基本的にはよく似た字音だったと思われる。○宣＝左訓「サキニ」（先に）。この左訓  
 は次の「割注」の解釈を生かしたものである。「宣」を同音字の「先」と読み替えて

いる（曲解）。○「作<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>」（割注）＝（「宣（キラキラとして）」は「先（さき）」（という文字の意味）とする。この割注は中国原本に存する。○著<sup>ニ</sup>左訓「シラミノアルハ」。同じく次の割注（原注）の内容を踏まえた解釈。本来「著」は「見事である」「顯著である」という意味に用いるべきだが、ここでは同音語「蛙」（「虱がたかっている」「虫に食われている」の意味で用いていることを、施訓者・遠山荷塘が左訓の形で示したものの。○「作<sup>レ</sup>蛙<sup>ニ</sup>」（割注）＝（著（見事な））は「蛙（虫が食う）」（という文字の意味）とする。同じく中国刊本に附された原注である。○貝<sup>ニ</sup>様子、さま。「貝」は「貌」の異体字。○「帽<sup>ト</sup>全音」（割注）＝（「貌[mào]」は「帽[mào]」と同じ発音である。本話に附された中国音に関する割注は、すべて中国刊本に存するもの。

## 補注

この話は、『笑府』卷十三 閨語部（第五六四話「蛙帽」）、『絶纓三笑』卷四 儒笑（第六〇二話「赫喧」）に類話がある。それぞれ本文は以下の通りである。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』二二〇頁参照。

## 『笑府』第五六四話（卷十三 閨語部）

## 蛙帽

有盛大盛二者。所戴簪帽。遇暑月。同置一所。至冬。復取戴之。其一蛙損。兄弟皆認其不蛙者。遂致喧鬧。適一士經過。二人以其讀書人也。請決之。士執蛙帽審覆再四。乃睨盛大曰。此汝帽也。問何以證之。曰。豈不聞大學註云。宣<sup>先</sup>著<sup>蛙</sup>盛大之貌<sup>帽</sup>。

## 『絶纓三笑』第六〇二話（卷四、儒笑八）

## 赫喧

有盛大盛二者。冬月所戴簪帽。遇暑月。杳放一處。至冬復取著之。其一蛙損。兄弟爭認其不蛙者。遂致喧鬧。訟之官。官執蛙帽反覆再三。乃睨視盛大曰。此汝帽也。大問何以知之。官曰。豈不

聞大學淇澳註云。先蛙盛大之帽乎。宣<sup>宜</sup>著<sup>盛</sup>盛大之貌。

盛大答云。須論帽之高低便知。官曰。何謂也。曰。截然<sup>○</sup>高<sup>○</sup>。大帽<sup>○</sup>也<sup>○</sup>。

『笑府』『絶纓三笑』『笑林広記』の三書は、それぞれ微妙に本文に異同はあるが、話の筋もオチも同じである。ただし『絶纓三笑』には、この話の続編として、『笑林広記』や『笑府』にはない、次の二行が付け足されている。

（『大学』注の説明を受けて、それならばと）盛大は答えて言う。「帽子の高さを調べたら（誰のものか）分かるんじゃないですか。」役人は言う。「どういことだ。」（同じく『大学』の注に）『截然として高きは、大の帽なり（キリリと高く聳え立っているのが盛大の帽子である）』とあるからです（本来は「截然として高大なる貌なり」と訓むべきところ）。

中国清代の儒者たちの間で、「四書」の注をいじくり回すのがたいそう好まれたことが分かる。この手の儒者好みの話柄を集めたのが、『絶纓三笑』卷四「儒笑」である。なお、『絶纓三笑』に付加されたさきの二行に引用されている『大学』注の本文は「大学伝十章」に見え、元禄五年（一六五二）刊の和刻本『四書集註』卷一（一丁裏）には、次のように訓点が施されている。

（節。）截然<sup>せつぜん</sup>高大<sup>こうだい</sup>貌<sup>かたち</sup>（截然<sup>せつぜん</sup>高大<sup>こうだい</sup>の貌<sup>かたち</sup>）

この注文の本来の意味（朱子による解釈）を現代語訳すると、以下のようになる。

（『詩経』小雅「節たる彼の南山、維れ石巖巖たり（節彼南山。維石巖巖）」に見える）「節」という文字は、「截然として高くそびえ立っているさま」という意味である。

言うまでもなく、これを「截然としてぐんと高いのが兄・盛大の帽子である」と解釈するのは、「曲解」（こじつけ）というものである。

近世後期（十九世紀）の日本では、漢文戯作の一つとして、經典の解釈をねじ曲げて遊ぶ「枉解」ものが流行した。『笑林広記』のこの手の笑話は、漢文洒落本『論語町』（明和頃刊、『洒落本大成』第五卷所収）、狂詩集『通詩選笑知』（天明三年（一七八三）刊、新日本古典文学大系84『寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』所収）に見られる近世日本の知識人たちの戯作精神と、一脈通じるものがある。

## 余説

折よく（折悪しく）通りかかった教養ありげな読書士が、儒学の基礎テキストである『大学』注を、事もあろうに、まったくデタラメに引用したことを嘲った話（『宣著盛大之貌』を「先・旺・盛大之帽」と読み誤った）。この読書士が、もしも経書注の本文をわざと曲解してみせたのなら、教養人士による知的な「ボケ」と言うこともできようが、『笑林広記』編者の意図は、恐らく基礎的な經典すらろくに読めない似而非知識人を揶揄するところにあつたのであろう。

なお、この話も中国語音ネタの一つである。

## ⑪ 無一物（中身は空っぽ）

### 原文

無二一物「調秀才雖然戴高帽腹中却無一字也」  
 窮人往各寺院、竊取神物靈心、止有土地廟未取、及去挖開、見空空如也、乃駭嘆曰、看他巾中便帶了一頂、原來腹中一毫、無二一物、

### 書き下し文

一物無し「秀才高帽を戴くと雖然も腹中却て一字無きを調す」  
 窮人各寺院に往て、神物靈心を竊み取る、止だ土地廟の未だ取らざる有り、去きて挖開するに及びて、空空如たるを見る、乃ち駭き嘆じて曰く、看るに他の巾は便ち一頂を帶了すれども、原來腹中には毫も一物無し、

### 現代語訳

貧乏で生活に困っている人が、片っ端から寺をあさり、（仏像の胎内に収められて

いる）宝物を（洗いざらい）盗み取った。まだ盗んでいないのは、土地の神が祀られている祠だけになった。ところが、祠へ行き、本尊の御神体を開いてみると、中身はすっからかんだった。愕然として、ため息を吐きながら、こう言った。

「偉そうに学者気取りの、帽子をかぶっているくせに、なんだ中身は空っぽなのか（所詮、学者気取りの連中は、見かけ倒しの唐変木に過ぎぬのだ）。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上腐流部（三丁表）。『新鐫笑林広記』巻之二腐流部（第八二話、四丁表）。○「調秀才雖然戴高帽腹中却無一字也」（割注）＝秀才は（文人風の四角く高い）帽子をかぶっているが、腹の中には一文字もない（教養のかけらもない）ことをからかった話。明清時代、教養のある「秀才」「諸生」「廩生」「生員」たちは、「方巾[Fangjin]」と呼ばれる四角い帽子をかぶっていた。「文人氣質」「教養ありげな様子」「学者ぶって、気取った様子」を「方巾気[Fangjinqi]」という。この割注は遠山荷塘によるもので、原本にはない。○神物靈心＝神聖なもの、靈的な心。ここでは、神聖な仏像の体内に収められている宝物（金目のもの）の意。左訓「カミノダウク ハラコモリ」（神の道具、腹籠もり）。○土地廟＝「土地神」（土地の神様、氏神様、鎮守様）が祀られている祠。○挖開[wākāi]＝掘って穴を開ける。「挖」は「掘る」という動詞、「開」は、「掘る」という動作の結果、穴の開いた状態、切り開かれた状態になった、という結果補語。現代中国語の用法と同じ。左訓「ホリアケル」（掘り開ける）。○空空如也＝からっぽである、まったく何もない、すっからかん。「如」は「然」と同様、副詞・形容詞の接尾辞。「空空如也[kōngkōngrúyě]」は、現代中国語でも時々用いられる。「空空」「左訓「カラ」（空）。○一頂＝（帽子）ひとつ。「頂」は、帽子を数える序数詞。○原来[yuánlái]＝なるほど、そうだったのか（副詞）。それまで知らなかったことがはつきりしたときに、驚きとともに口をついて出てくる言葉。現代中国語と同じ。日本語の「元来」とは、微妙に異なる。

## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。



余説

四角い帽子をかぶって威張っているくせに、実は腹には何も無い（本当は教養も知識もない）インテリたちの無学を馬鹿にした話。後出の第一三話「腹内全無」にも通じる。

この話に見える描写は、清代の中国において、地元の守り神である「土地神」が、帽子（頭巾）をかぶっていたことを示す貴重な風俗資料でもある。

⑫ 四等親家（同じ棒でビシバシ叩かれた間柄）

原文

四等親家「嘲書生獸子」

両秀才同時四等ニテ、于ニ受責時ニ曾識一面、後ニ聯姻ス、會親ノ日、相見男親家曰、尊客曾在何處會過來、女親家曰、便是有些面善、一時想不起、各沈吟間、忽然同悟、男親家點頭曰、女親家亦點頭曰、

書き下し文

四等親家「書生獸子を嘲る」

両秀才同時に四等になる、責を受ける時に於て曾て一面を識る、後聯姻す、會親の日相見す男親家曰く、尊客曾て何処に在りて會過來す、女親家曰く、便是些かの面善有り、一時想ひ起さず、各沈吟の間、忽然として同じく悟る、男親家點頭して曰く、女親家も亦點頭して曰く、

現代語訳

二人の秀才は、（三年に一度の「歳試」を受験した際、不覚にも）同時に四等の成績を取ってしまった。（罰として、ともに笞打ちの）刑を受けているとき、二人は顔を合わせ、知り合いになった。その後（何年も時が経ったころ）、両家の縁組みがととのい、親類一同顔合わせの日に、再び顔を合わせるようになった。男性側の父親が、

「以前に、どこかでお目にかかったような気がするのですが。」  
と言うと、女性側の父親も、

「たしかに何となく見覚えがあるのですが……」

と言う。ところが（どこで顔を合わせたのか）、すぐには思い出せなかった。小首をかしげながら、懸命に思い出そうとしていたところ、二人は同時に（あのときのことを）ハツと思い出した。男性側の父親がウンウンとうなずきながら

「はあん。」

と言うと、女性側の父親もうなずきながら

「はあん。」

と答えた。

注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部（三丁表裏）。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部（第九一話、七丁表）。○四等親家＝試験で落第点を取り、ペナルティーとして「杖刑」（笞打ちの刑）に処された親戚のこと。「生員（秀才、諸生）」は、その知識レベルが規定の水準に達しているかどうかを調べるため、三年に一度、「歳試[suishō]」と呼ばれる試験を受ける義務があった。試験の成績は六つの等級に分けられ、四等の者は罰として「杖刑[zhàngxíng]」（イバラの枝や竹の棒で、背中、臀部、脚などを叩きつける刑罰）に処せられた。後出の第一五話「求籤」に「四等止杖責」（四等の場合は「杖刑」を受けるだけで済むが）とある。「親家[qīnjiā]」は、子女の婚姻により生じた親同士の姻戚関係をいう。左訓「ヨダンメノシンルイ」（四段目の親類）。○「嘲書生獸子」（割注）＝間拔けな書生を馬鹿にした話。この割注は遠山荷塘によるものであり、原本にはない。「獸子[dàn]」は「間拔け」「愚か者」の意。○同時四等＝同時に四等の成績をとった。左訓「キフダイヨバンメ」（及第、四番目）。○聯姻＝婚姻関係によって両家が親戚となること。左訓「エンクミ」（縁組み）。『笑府』『絶縷三笑』所収の類話では「久之聯親」「久之聯姻」となっており、「久之（久しうして）」（ずいぶん長い年月が過ぎたあと）であることが分かる。○會親＝結婚の後、双方の親族が贈り物などして顔つなぎを行うこと。左訓「シンルキヨリアキ」（親類、寄り合い）。○尊容＝尊顔。相手の容姿に対する敬称。左訓「オスカタ」（お姿）。○曾在何處會過來＝以前にどこかでお目にかかったことがある。「會過來」は、「これまでにお会いしたことがある」という経験を表すアスペクト助詞「過」の用法と思われるが、『笑府』『絶

『笑三笑』『笑林広記』、いずれも「会過來」となっている。現代中国語では「曾經在  
里見過（面）」という。左訓「トコデカメニカ、ツタヤウデアル」（どこでか、お目  
にかかったようである）。○便是〓おつしやる通り、その通りです。現代中国語の「就  
是」と同じ。相手の意見に対する同意を表す。左訓「ナルホト」（なるほど）。○一時  
想不起〓とっさには思い出せない。「想不起」は、動詞「想」と方向補語「起」の間  
に否定詞「不」が置かれた構文で、不可能（思い起こすことができない）を表す（方  
向補語の不可能形）。現代中国語と同じ。左訓「チヨイトカンガヘツカス」（ちよいと  
考えつかず）。○忽然同悟〓たちまち二人同時にハッと気がつく。左訓「フトリヤウ  
ホウトモサトル」（ふと両方とも悟る）。○點頭〓うなずく。現代中国語と同じ。左訓  
「ウナツイテ」（頷いて）。○嘆〓〓「啊」、前出（第八話「楊相公」）。ここでは、そ  
れまで分からなかったことにハッと気がついたときの驚きと訝りの気持ちが表れてい  
る。単なる驚きではなく、「あつ、そうだったのか、ええ？ あちゃあ。」という  
ぐらいの意味であろう。左訓「ホンニ」。

#### 補注

この話は、『笑府』巻二（第四二話「四等親家」）、『絶纓三笑』巻一時笑・澹語（第  
四七話「四等親家」）に類話がある。それぞれ本文は以下の通りである。『笑府』の日  
本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』五〇～五一頁参照。

『笑府』第四二話（巻二腐流部）

#### 四等親家

兩秀才同時四等。于受責時曾識一面。久之。聯親。于  
會親日相見。男親家曰。尊容曾于何處會過來。女親  
家亦曰。便是面善。一時想不起。各沈吟間。忽然同悟。  
男親家點頭曰。嘆。女親家亦點頭曰。嘆。

『絶纓三笑』第四七話（巻一、時笑・澹語四七）

#### 四等親家

兩秀才聯名四等。於遞受責時。曾識一面。久之  
聯姻。會親日相見。男親家曰。尊容曾於何處會

過來。女親家曰。便是面善。一時想不起各沈吟  
間忽然同悟男親家點頭曰嘆女親家亦點頭  
曰嘆

如此親家真正門當戶對。說合者可稱良媒

『絶纓三笑』に見える末尾の評語は、次のような意味である。

このような姻戚関係は、まさしく「門当戸対」（家柄がちょうど釣り合っている）  
というものである。仲を取り持った人は、「肝煎り上手」と言えるであろう。  
また、『絶纓三笑』には、圈点が大量に附されたオチの部分に、「全人絶倒」（すべ  
ての人が腹を抱えて笑い転げる）という書き込みがある。この書き込みは、中国清代  
の文人の手になるものと思われるが、この話を読み、本気で大笑した人物がいたこ  
とを示している。

#### 余説

「四等親家」を現代風に訳せば、「テスト結果がD判定の親類縁者」となろう。「秀才」  
「諸生」「廩生」「生員」に義務づけられた実力テスト（歳試）の結果は、以下の六  
等に分類される。

一等、文理平通。二等、文理亦通。三等、文理略通。四等、文理有疵。五等、文理  
荒謬。六等、文理不通。まさに、受験生のA B C D E F判定に相当する。この試験の  
結果により、階級が上がる場合もあれば、処罰される場合もあった。たとえば、四等  
（D判定）を取れば、罰として棒たたきの刑に処せられ、六等（F判定）を取れば、「生  
員」の身分は剥奪され、庶民に格下げとなった。科挙の試験制度、受験生の実態につ  
いては、清代白話小説『儒林外史』（全五五回）に詳しい。『儒林外史』は、中国古典  
文学大系43『儒林外史』（平凡社、一九六八年）に稲田孝氏の全訳と解説が備わる。

⑬ 腹内全無（お腹の中には何もない）

#### 原文

腹内全無シ「同上」

一秀才ヲ試シ、日夜憂鬱シテ不レ已、妻乃慰之曰、看レハ你作レ文如レ此ノ之難キヲ、  
 好ニ似レ奴生レ産一一般、夫曰、還是你每生レハ子容易、妻曰、怎レ見レ得、  
 夫曰、你是有レ在二肚裏一、我是没レ在二肚裏一、  
 夫曰、你是有レ在二肚裏一、我是没レ在二肚裏一、

## 書き下し文

腹内 全く無し「同上」

両秀才 將に試んとす、日夜 憂鬱して已まず、妻 乃ちこれを慰めて曰く、あなたが文  
 を作る 此の如きの難きを看れば、好に 奴が生産するに似て一般なり、夫曰く、還  
 た是 你 毎子を生むは容易なり、妻曰く、怎んぞ見得る、夫曰く、你是 是 肚裏に  
 在る有るもの、我は是 肚裏に在ること没きものなり、

## 現代語訳

ある秀才、試験が迫ってきたため、昼も夜も憂鬱でならなかった。そこで奥さんは、  
 こう言って慰めた。

「あなたがこんなに文章を作るのがつらいなんて、ちょうどわたしが赤ちゃんを産  
 むのと同じようなもののね。」

すると夫は、

「いや、やっぱりお前たちが子供を産む方がまだマシだよ。」

と言う。

「なんでそうなるのよ。」

と奥さんが訊ねると、夫はこう言った。

「お前の方は、お腹の中にあるものを出すんだろ、ところがどっこい、わしの方は  
 な、お腹の中に入っていないものを、ひねり出さなきゃならないんだよ。」

## 注

○『訳解笑林広記』卷之上腐流部（四丁表）。『新鐫笑林広記』卷之二腐流部（第九三話、  
 七丁裏）。○「同上」（割注） 前と同じ。直前の笑話「四等親家」のタイトル下に附  
 した割注「嘲書生馱子」（間拔けな書生を馬鹿にした話）と同じである、という意  
 味。○將試 試験の日が迫ってきた。左訓「コ、ロミニデヨウトスル」（試みに出よ

うとする）。「コ、ロミ」（試み）とは、試験のこと。第一四話「不完卷」（左訓）にも、  
 「コ、ロミノ文章カキシマハヌ」（試験の文章（答案）を最後まで書き上げられなかつ  
 た）とあり、「コ、ロミ」を「試験」の意味で使用している。○憂鬱「yōyū」 気が  
 ふさいで。訓読「憂鬱して」、左訓「ウツ／＼トシテ」。○你 あなた、二人称代名詞。  
 左訓「オマヘ」（お前）。○好 まさに、ちょうど。訓読「好に」、左訓「チャウト」（ち  
 うど）。遠山荷塘の訓読と左訓は実に適切である。この話は、和刻本『笑府』（半紙本、  
 明和五年（一七六八）、京都刊、第四話（上巻、二丁表）にも収録されているが、そ  
 の訓読の水準は決して高いものではなかった（拙稿『笑府』三種比較攷（上・下）」  
 （『国語国文』一九九九年一月二月）参照。和刻本『笑府』（半紙本）に附された訓は、  
 「好」（よし）。○好似奴生産一般 ちょうど私が赤ちゃんを産むようなものですね。「好  
 似一般」は、現代中国語の「好像一样」「好像似的」（ちょうど／＼のようである）  
 に相当する。左訓「チャウトワタシカサンラスルトヨナシコト」（ちょうど私が産  
 をすると同じこと）。○奴「nu」 私、わたし。○近世語、妾（近世語）。女性の一人称（謙  
 称）。○還是「hàishì」 やはり、依然として、相変わらず。「還」の原義は「まだ」。「ま  
 だ（現在の状態がそのまま維持されている）」 、「やはり」。左訓「マアダ」。○你 毎  
 「你們」（あなたたち）。「毎」は複数形語尾（旧白話語彙、現代中国語の「們」と  
 同じ。「你 毎」という遠山荷塘の施訓は正確である。和刻本『笑府』（半紙本）は、「你  
 每生レ子」（你 子を生む毎に）と誤読している。○容易 いたやすい。左訓「タヤスイ」。  
 ○怎見得 どうしてそうだと分かるのか。左訓「ドウシタワケダ」（どうした訳だ）。

## 補注

この話は、『笑府』卷二（第三九話「産諭」）、『絶纓三笑』卷二時笑・風語二九（第  
 三二九話「産諭」）に類話がある。それぞれ本文は以下の通りである。『笑府』の日本  
 語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』四八頁参照。なお、大木康『笑林・笑賛・笑府  
 他（歴代笑話）』（中国古典小説選12、明治書院、二〇〇八年、一三九～二四〇頁）に  
 『笑府』の本文として収録されているのは『笑林広記』のものである。和刻本『笑府』（明  
 和五年（一七六八）、京都刊）に収められた本文を使用したであろう。『笑府』収録  
 話の原文は下記の通りであり、『笑林広記』とはかなり文字に異同がある。また、『絶  
 纓三笑』の本文は、『笑府』の方により近い。

## 『笑府』第三九話 (卷二腐流部)

産諭

一士屢科不利。其妻素患難産。謂夫曰。中這一節。與生産一般。難難。士曰。你却是有在肚裡。

## 『絶纓三笑』第三二九話 (卷二、時笑・風語二九)

産諭

一士畏考。妻曰。你們的考。想與我們的生産一般難。士曰。你們是有在肚裏的。

有者難得出來。無者難得進去。○先輩諺語云。天下只有兩箇鬍子不勢利。隨你極富極貴。閨鬍子不放他在世上。只看得。隨你極富極貴。孔鬍子不進他肚裏去。只看得。實是絶頂議論。

『絶纓三笑』末尾の評語は、次のような意味である。

(お腹の中に何が) 入っている者は、外に取り出すのが難しく、(お腹の中に何も) 入っていない者は、中に入っていくのが難しい。○先達のおどけ話に、次のようなものがある。「この世の中に、権力や利益に左右されないのは、ただ二人の鬍じいさんしかない。あなたが如何に金持ちであっても、如何に身分が高くても、閻魔の鬍じいさんはそいつを(地獄から) 人間界に解放してやったりはしない、ただ見ているだけである。また、あなたが如何に金持ちであっても、如何に身分が高くても、孔子の鬍じいさんはそいつをお腹の中に入れてやったりはしない(学問に秀でた聖人にしてやったりはしない)、ただ見ているだけである。」これぞ真正正銘、究極の見解(これ以上はない、極めつけの公平無私の裁き)というものであろう。

なお、本話は以下の和刻本にも採録されている。和刻本『笑府』半紙本二卷二冊(明和五年(一七六八)、京都刊)、『笑林広記鈔』半紙本一卷一冊(沢文のみ、安永七年(一七七八)刊)。また、『訛準笑話』大本一卷一冊(文政七年(一八二四)刊)は、この笑話にもとづき、場面設定を江戸時代の詩社に取りなした漢文笑話を作っている。以下にそれぞれの原文を載せる。

## 『笑府』半紙本一卷一冊、第四話(二丁表)

一秀才將試。日夜憂鬱不<sub>レ</sub>已。妻乃慰<sub>レ</sub>之曰。看你<sub>カ</sub>作文如<sub>レ</sub>此之難。好<sub>シ</sub>似<sub>ニ</sub>奴<sub>カ</sub>生<sub>ニ</sub>産<sub>一</sub>一般。夫曰。還是你每<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>子<sub>ヲ</sub>容<sub>一</sub>易。妻曰。怎<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>得<sub>スル</sub>。夫曰。你<sub>ハ</sub>是有<sub>レ</sub>在<sub>ニ</sub>肚<sub>ハ</sub>裏<sub>一</sub>的。我<sub>ハ</sub>是沒<sub>レ</sub>在<sub>ニ</sub>肚<sub>ハ</sub>裏<sub>一</sub>的。

『笑林広記鈔』第一〇話「腹内全<sub>ク</sub>無<sub>シ</sub>」(四ノ五丁裏)

一秀才及第二行<sub>ニ</sub>ント欲<sub>シ</sub>日<sub>ニ</sub>夜<sub>ニ</sub>憂鬱<sub>シテ</sub>已<sub>ズ</sub>妻之ヲ慰<sub>メテ</sub>曰。汝<sub>カ</sub>文<sub>ヲ</sub>作<sub>ル</sub>ノ難<sub>キ</sub>ヲ見<sub>レ</sub>ハ我<sub>ハ</sub>産<sub>ニ</sub>ヲナスト一般<sub>ナリ</sub>夫<sub>ノ</sub>曰。汝<sub>カ</sub>子<sub>ヲ</sub>産<sub>ハ</sub>還<sub>テ</sub>容<sub>易</sub>ナリ。妻<sub>ノ</sub>曰。怎<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>得<sub>夫ノ</sub>曰。汝<sub>ハ</sub>是<sub>ニ</sub>肚<sub>ハ</sub>裏<sub>ニ</sub>モノアリ我<sub>ハ</sub>肚<sub>ハ</sub>裏<sub>ニ</sub>モノガナヒ。

## 『訛準笑話』第一六話(三丁裏六ノ九行目)

詩社ノ宿題。期迫<sub>ニ</sub>明日<sub>ニ</sub>。有<sub>ニ</sub>情<sub>ヲ</sub>而俄<sub>ニ</sub>作<sub>ル</sub>者<sub>一</sub>。夜參半。沈吟未<sub>レ</sub>成。喟然<sub>シテ</sub>而歎<sub>シテ</sub>曰。嗚呼。苦哉。腹<sub>ハ</sub>且<sub>レ</sub>裂<sub>ニ</sub>裂<sub>ニ</sub>矣。婦人在<sub>レ</sub>旁。曰。與<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>子<sub>ヲ</sub>何如。曰。不<sub>レ</sub>啻<sub>ニ</sub>啻<sub>ニ</sub>也。生<sub>レ</sub>子<sub>ハ</sub>舉<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>耳。索<sub>レ</sub>句<sub>ヲ</sub>之<sub>ニ</sub>苦<sub>ハ</sub>。素<sub>ト</sub>腹中<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>無<sub>。豈不<sub>ニ</sub>尤<sub>ニ</sub>艱<sub>ニ</sub>ナラ哉。</sub>

『訛準笑話』の文体は、中国笑話の会話文(白話)とは異なり、文言(古典漢文)で記されている。漢文による文章作成教本(例文集)として出版されたためであろう。江戸時代の儒学者に必要とされたのは、現代中国語(唐話)による会話や作文ではなく、文言(古典漢文)による作文または作詩能力であった。『訛準笑話』の意味は以



○『訳解笑林広記』巻之土腐流部(四丁表裏)。「新鐫笑林広記」巻之二腐流部(第九四話、七丁裏)。○「嘲<sup>ス</sup>資縁<sup>シテ</sup>入<sup>レル</sup>場<sup>ヲ</sup>書生<sup>ヲ</sup>」(割注)＝賄賂とコネで科挙試験会場に入った書生を馬鹿にした話。「資縁<sup>シテ</sup>入<sup>レル</sup>場<sup>ヲ</sup>書生<sup>ヲ</sup>」は、賄賂やコネで権力者に取り入ること。「入場<sup>にちゅう</sup>」は、科挙の試験会場に入ること。この割注は、遠山荷塘によるものであり、原本にはない。○一生＝ある(一人の)「生員」「諸生」「秀才」。科挙の第一試験に合格した「秀才」は、知識レベルをチェックするため、三年に一度、「歳試」と呼ばれる試験を受けなければならなかった(第一二話「四等親家」参照)。○不完卷＝「歳試」の答案を最後まで書き上げることができなかった。「卷<sup>くわん</sup>」は、試験答案のこと。左訓「コ、ロミノ文章カキシマハヌ」(試みの文章、書きしまわぬ)。「コ、ロミ」とは、「試験」の意(第一三話「腹内全無」前出)。○考置四等受朴＝試験の結果、四等(D判定)となり、棒たたきの刑を受けた、という意味。「考<sup>かう</sup>」は、試験を受ける、受験するという意味の動詞。「考」に左訓「シラベヤク」(調べ役)を附すのは誤訓である。「置<sup>ち</sup>」は、その結果、次のように「なった」ことを表す結果補語。テストを受けた結果、「四等(下から三番目の等級)」という処罰対象ランクになった、そのようなレベルに「置かれた」「落ち着いた」という意味。「受朴<sup>しゅうぼく</sup>」は、「朴樹」(エノキ、ヨノキ)の枝で、背中、臀部、脚などを殴られること。笞<sup>ち</sup>打ち、棒たたきの刑罰を受けるという意味。第二二話「四等親家」参照。○若<sup>わ</sup>做<sup>し</sup>り完<sup>かん</sup>シ＝もし

も(答案を)最後まで書き上げていたら。下に「看了<sup>みまわ</sup>」という語がなければ、「若<sup>も</sup>倣<sup>つ</sup>完<sup>を</sup>」と訓むべきところであろう。「完<sup>を</sup>」の訓読不明。○看了定要打殺<sup>二</sup>(答案を)見て、必ずや(あなたを棒で)死ぬほど叩<sup>たた</sup>きのめすであろう。「定<sup>ding</sup>」は、「一定<sup>[yiding]</sup>」「必定<sup>[biding]</sup>」(必ず、きつと)という意味の副詞。「要<sup>[yao]</sup>」は、「しようとする」ことを表す助動詞。いずれも現代中国語と同じ用法。この意を汲んで、「要<sup>二</sup>」には右傍訓「(一セント)ス」が振られている。「打殺<sup>二</sup>」は、死ぬほどぶちのめす、または、叩<sup>たた</sup>き殺す意。「殺<sup>二</sup>」は強意の結果補語だが、本当に殺してしまってもよい。

## 補注

この話は、原本『笑府』『絶纓三笑』、和刻本『笑府』などに類話はない。

## 余説

答案を書けば書くほど、知的レベルの低さが露呈するという、間抜けな「生員」(「諸生」「秀才」「廩生」を馬鹿にした話。

第一二話「四等親家」にも、「生員」のレベルチェックテスト(「歳考」)に関する笑話が収録されており、次の第一五話「求籤」も、「歳試」がらみの話柄である。三年に一度とはいえ、「生員」にとって「歳試」は極めて大きなストレスとなっていたことが窺<sup>うかが</sup>われる。このような笑話を作った読書人にとっても、実は他人事<sup>ひとこと</sup>ではなく、自分自身のストレスを、このような笑話によって発散していたのかもしれない。

## ⑮ 求籤<sup>きゅうせん</sup>(おみくじを引く)

### 原文

求<sup>レ</sup>籤<sup>ヲ</sup> 同上  
一士<sup>ニ</sup>歳考<sup>ニ</sup>求<sup>レ</sup>籤<sup>ヲ</sup>、通<sup>シテ</sup>陳<sup>シテ</sup>曰<sup>ク</sup>、考<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>六等<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>上上<sup>一</sup>、四等<sup>ニ</sup>下下<sup>ナレ</sup>廟祝<sup>曰ク</sup>、相<sup>ニ</sup>公差<sup>ハ</sup>矣<sup>、</sup>四等<sup>ニ</sup>止<sup>ミ</sup>杖責<sup>、</sup>如何<sup>シ</sup>反<sup>ニ</sup>是<sup>下下</sup>ナル、士<sup>曰ク</sup>、非<sup>ニ</sup>汝<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>、六等<sup>ニ</sup>黜<sup>退</sup>、極<sup>ニ</sup>是<sup>乾</sup>淨<sup>也</sup>、若<sup>シ</sup>是<sup>四等</sup>ニシテ、看<sup>ニ</sup>了<sup>レ</sup>我<sup>ノ</sup>的<sup>ノ</sup>文字<sup>一</sup>、決<sup>シテ</sup>被<sup>ニ</sup>打<sup>殺</sup>、ヒツコマセラレ

## 書き下し文

籤<sup>せん</sup>を求<sup>もと</sup>む 同上  
一士<sup>いし</sup>歳考<sup>さいかう</sup>に籤<sup>せん</sup>を求<sup>もと</sup>む、通<sup>つう</sup>陳<sup>ちん</sup>して曰<sup>いは</sup>く、考<sup>かう</sup>六等<sup>りくとう</sup>に在<sup>あり</sup>ては上上<sup>じやうじやう</sup>を求<sup>もと</sup>む、四等<sup>しとう</sup>にては下下<sup>げげ</sup>なれ 廟祝<sup>べうしゆく</sup>曰<sup>いは</sup>く、相公<sup>さうこう</sup>差<sup>さ</sup>へり、四等<sup>しとう</sup>は止<sup>た</sup>だ杖責<sup>ぢやうせき</sup>なり、如何<sup>いかん</sup>ぞ反<sup>かへつ</sup>て是<sup>これ</sup>下下<sup>げげ</sup>なる、士<sup>し</sup>曰<sup>いは</sup>く、汝<sup>なんぢ</sup>の知<sup>し</sup>る所<sup>ところ</sup>に非<sup>あら</sup>ず、六等<sup>りくとう</sup>にして黜<sup>ちゆう</sup>退<sup>たい</sup>せば、極<sup>きは</sup>めて是<sup>これ</sup>乾<sup>かん</sup>淨<sup>じやう</sup>なり、若<sup>も</sup>し是<sup>これ</sup>四等<sup>しとう</sup>にして、我<sup>われ</sup>の文字<sup>もじ</sup>を看<sup>み</sup>了<sup>は</sup>れば、決<sup>けつ</sup>して打<sup>だ</sup>殺<sup>さう</sup>せられん、

## 現代語訳

ある書生、試験(「歳試」)に臨んでおみくじを引き、お祈りをしてこう言った。

「試験の結果がF判定(六等)ならば大吉を、D判定(四等)ならば凶が出るよう  
にお願いします。」

孔子廟の管理人は言った。

「旦那さん、それは違うんじゃないですか。D判定(四等)の場合は、棒たたきの  
刑を受けるだけです。どうしてそれが凶なのですか。」

書生は言う。

「あなたは御存知ないのです。F判定(六等)なら、庶民に格下げ(「生員」の資  
格を剥奪され、受験地獄から解放される)、極々さっぱりしたものです。ところ  
がですね、もしD判定(四等)なんぞを取って、私の答案を読まれようものなら、  
ぜったい私は、死ぬほどぶちのめされることになるでしょう。」

## 注

○『訳解笑林広記』巻之上腐流部(四丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之二腐流部(第九五  
話、七丁裏(八丁表))。○籤<sup>[qian]</sup> = おみくじ。左訓「ミクジ」(御籤)。○「同上」  
(割注) = 「上」(前話)の注と同じ。第一四話「不完卷」の標題に附された割注と同  
じ、つまり「嘲<sup>二</sup>資緣<sup>一</sup>入場<sup>ニ</sup>書生<sup>ヲ</sup>」(賄賂とコネで科挙試験会場に入った書生を馬  
鹿にした話)という意味。○歳考 = 「生員(秀才、諸生、廩生)」に義務づけられた、  
三年に一度の知識レベルチェックテスト。このテストの結果次第で、昇級すること  
あれば、処罰されることもあった(第一二話「四等親家」、第一四話「不完卷」参照。  
○通陳 = 「椿告」「椿祝」「祝告」、神仏にお祈りすること。ここは儒学の神様「孔子」

が祀<sup>まつ</sup>られている「孔子廟」でお祈りしたのである。左訓「ミナイヒタテル」（みな言ひ立てる）。遠山荷塘は、「通陳」を「一通叙述」「通通陳述」と理解し、「思いの丈を」洗いざらい、すべて（＝「ミナ」）神様に申し述べる（イヒタテル）」と解釈したのである。○考在六等＝試験を受け、その結果、六等のランクになる、という意味。前話と同様「考」は「試験を受ける」意味の動詞。「在」は、その結果、次のように「なった」という意味を表す結果補語。○上上＝大吉。中国では伝統的に人や物を品評するとき、九つの等級に分けて考えた。上から順に「上上」「上中」「上上」「中上」「中中」「中下」「下上」「下中」「下下」の九つである（宋・王應麟『小学紺珠』『人倫・九等』）。江戸時代の評判記類に見える評語で言えば、「上上」が「極上々吉」、「下下」が「凶」に相当するであろう。○六等＝「歳考」における最低ランクの成績評価。後に出てくるように、「六等」の成績を取った者は「黜退[*chutui*]」（後出）、「四等」の者は「杖責[*zhàngzé*]」（棒たたきの刑）の処分を受ける（第一二話「四等親家」および第一四話「不完卷」参照）。○廟祝＝孔子廟の灯明や線香を管理する人。『笑林広記』本文により、「廟祝」が「おみくじ」なども扱っていたことが分かる。左訓「カンヌシ」（神主）。○黜退＝「生員」の資格を剥奪され、庶民の身分に格下げされること。「生員」は、俸給を受けながら科挙の受験勉強に励むことのできる、非常に優遇された身分であった。左訓「ヒツコマセラレル」（引つ込ませられる）。○乾淨[*gānjìng*]＝きれいである、さっぱりしている。現代中国語と同じ。左訓「サツバリ」。

#### 補注

この話は、『笑府』巻二（第四一話「求籤」）、『絶纓三笑』巻二時笑・風語三〇（第三三〇話「求籤」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』四九～五〇頁、大木康『笑林・笑賛・笑府他（歴代笑話）』（中国古典小説選12、明治書院、二〇〇八年、二四〇～二四二頁）参照。なお、和刻本『笑府』に類話は収録されていない。

『笑府』収録話および『絶纓三笑』収録話の原文は、下記の通りである。『笑林広記』が編者の評文を削除している以外は、ほぼ同文である。

#### 『笑府』第四一話（巻二腐流部）

##### 求籤

一士歳考求籤。通陳考六等上々。四等下々。廟祝曰。相公差矣。四等止杖責。如何反是下々。曰。此非你所知。六等黜退。極是乾淨。若在四等。看了我文字。決被打殺。

看他自知之明。定是有資質秀才。恨不肯用功耳。又有評秀才惡習你云。隨你兩箇人考。也要擠一擠。隨你十頓飯。也要搶一搶。隨你一箇題目。也要結燭。隨你一名不取。也要說不公道、逼真可笑。

#### 『絶纓三笑』第三三〇話（巻二、時笑・風語三〇）

##### 求籤

一士遇考求籤。祝曰。六等上上。四等下下。人間如何倒要六等。曰。六等退了還乾淨。若在四等。看了文章。決被打殺。

##### 自知之明

#### 余説

これもまた、「歳試」にまつわる笑話である。自分の答案を採点され、その結果、棒で叩きのめされるよりは、むしろ「生員」の身分を剥奪され、科挙試験のプレッシャーから完全に解放された方が、後腐れなくさわやかだ、ということである。すべてを擲ち、受験地獄から逃げ出したいという切羽詰まった思ひは、古今東西変わることのない一面の真理であろう。

（次号に続く）

#### （附記）

本稿は、平成二七年度科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号二四五二〇二四四）東アジアの笑話と日本文学・日本語との関連に関する研究」による研究成果の一部である。

# An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji*, 1

Yosuke KAWAKAMI